おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成29(2017)年
3月号
通巻559号
毎月23日発行
(題字　矢追日聖)

★発行日　平成29年3月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷　大倭印刷株式会社
★定価　1部　250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

角ぐむ葦　　奈良市　井手泉さん撮影（文・2頁）

再録 昭和42(1967)年9月23日発行『すさのお』第12号より

対人関係における調和について

法主　矢追日聖（満55歳）

意志の伝達は容易ではない

大倭の根本義となっている「大らかな和やかな」人間像、しかもそれが理性を基盤としていなければならないということは、日頃、私はあなた達に口が酸っぱくなるほど話してきたつもりです。この人と人が互いに理解し合って、互いに和やかな調和を図ってゆくということは、日常生活においてかなり難しい事柄であります。この事は皆さんが百も承知のことと思うのです。大らかさなんて中々出てくるものではありません。

「意志の伝達」、つまり自分が思っていることを、自分が思っているその思いの儘(まま)で相手方に通じさせること、また、相手の意志を相手の思い通りに確実に聞き取ること、といった問題は中々容易なことではありませんが、だからといって煩わしい社会生活の中で、私達はこのことについて無関心でいる訳にもゆかないので、やれば必ず成るという固い決意をもって自己を鍛えてゆくという方向に努力を積み重ねてゆきたいものです。先のある人生ですから、いつかはその地点に到達できるものと私は信じています。

和やかに溶け合う人間像

お互いに意見を交換するときは、お互いに自分の思わくをもって臨むものです。だがここで、自分の思わくは絶対に正しいと信じてその場に臨むことは、好

ましからぬ態度です。それは、自分の意見に自分が縛られているのですから、円満な結論の出る筈がありません。

確固たる意見をもつことは大いに賛成ですが、是が非でも相手の意見をおさえて、一方的に押し進めようといった我執の念をもつことはよろしくないと注意したいのです。

家庭の中でも世間でも、「言うた」の「言わん」のといって互いに争いを起こし、結果として物も言わない不仲になったり、自己擁護のため自分は正論の位置において、相手を非道邪悪人らしくあちこちへ言いふらしているような現実問題を、私は数多くこの目で見、この耳で聞いてきました。

「一方を聞いて解なし」とは昔の人の言葉です。昔にもこんな人達が多くいたのでしょう。月にロケットが到着する現在にも、同じ程度の人間が多く実在しているのです。恥ずかしいとは思いませんかね。

お互いに意志の交流を図る方法としては、第一に言葉を用います。言葉だけでは制限がありますので、補足する意味で手まね、体のこなし、顔の表情、更にはその場の雰囲気等が必要になってくるのです。話し合いというものは、互いの思わくを交すことであり、双方の思わくをはずさない線を守りながら、ある一つの目的に対して話すことですから、いわば限られた一本のパイプの中で互いの意見が、抜けたり戻ったり、押したり押されたり、そうしてるうちに和やかに溶けあうものが出てくる、まあ、こうした形のものが普通といえるのでしょう。

ただし、双方の根底にあくまでも溶け合わないという要素、つまり我執を正義と穿き違えをしているようなものを双方がもっていたとすれば、これは人との和を欠くだけではなく、互いを破滅に追い込んでやがては世を乱す原因ともなりかねないので、その点をよく考えてほしいと思うのです。

逆に溶け合う要素といえば、一体感から起こってくる大らかさ、和やかさの心情です。いいかえれば、相手に対しての偏見や、悪感情にとらわれないで、更に優越感や劣等感におちいらないような心境を指しているのです。こんな人達が一人でも多くなれば、この世は楽しい所になるでしょう。私もあなたも、こうした人間像にたとえ一歩でも近づくよう手を取り合って精進しようではありませんか。

絶え間なき日常の修練を

最後にこの問題に関連性をもつ「犠牲」の心について一寸触れてみたいと思います。

故意に和を保つため、全面的に自分の意志を押さえて、相手の意見に同調し承服することは、私は美しい行為とは思えないのです。外見では一応調和がとれて穏やかそうですが、考えてみれば一方を生かし、他方が死んでいては、真の調和とはいえません。意識して殺した意思は、かえって心の中では生き残って自分を苦しめる結果となる場合が多いようです。

これは、謙譲の美徳ではなくツミをつくっていることになるのです。相手を生かすために、自己を殺すことは、一般にいわれる犠牲的精神とも見られますが、私はこうした言動について讃美することはできないのです。相手を生かすことによって自分が生き、自分が生きることによって相手を生かすといったような世渡りの仕方を私は望むのです。

公のため、人のために身を犠牲にすることは、最高の美徳と考えている人も多くあることと思います。犠牲という言葉の出所をたずねると、これは神聖な宗教的なものから発しているようですが、現在私達が使っている犠牲という言葉には、自己を殺すといういやな響きがあって、本来の意味とはおよそかけ離れたものがあるように感じます。

私は犠牲的精神を使命的精神に置き換えてみてはどうかと思うのです。これにはまたいろいろな問題があるでしょうが、使命感によっての言動は、私は一番尊いものであると思うのです。しかしこれは、ものに関しての善悪や正邪等を遙かに超越した高度な心境の持ち主でなければ、とんだ間違いを引き起こす危険性が多分に内在していますので、絶え間なき日常の修練が必要となってきます。

お互いに対人関係における調和の具体的方法を日々の生活の中に見出しながら、専ら修養に努めるようにしようではありませんか。

（昭和四十二年八月二十九日　日聖記）

※再録にあたり小見出しを考え直しています。

角ぐむ葦　～表紙写真によせて～

編集部に預けている私の写真集から、この写真を載せたいと編集部よりご連絡を頂きました。これは近くの溜池で撮影したもので、風で揺れ動きながら様々な形や色の模様を見せてくれる、波紋の面白さと美しさに引かれて写した中の一枚です。画面の右下のところに写っている鮮やかな黄緑色の葉はアシの萌芽です。

角ぐむとは角のように芽が出ることで、大正時代から唱い継がれた名曲「早春賦」の二番の歌詞に〝氷解け去り葦は角ぐむ〟とあり、暖かい春の到来を待ち焦がれる思いが象徴的に表現されています。しかしこの歌も今時は人気がないようです。古来日本人にとって最も身近な植物だったアシが「豊葦原の中津国」でも激減し、身近ではあまり見られなくなっているからです。

（井手泉）

特別寄稿

文化財をまもり伝える
―命とともに大切なもの―

文化財保存修復市民の会
奈良大学名誉教授　西山要一

1 1868年（慶應4）神仏判然令

古来日本では、山川草木などの自然界から竈やトイレなど住居内までいたるところに神々がおわしますが、飛鳥時代に印度から渡来した仏教は神道と一体となり平安時代には神仏習合の歴史・文化が形成され、生活の隅々に深く広がりました。

神仏判然令は、1000年の営みから生み出された神仏習合を基盤とする歴史文化を覆すものとなりました。仏教を除き、天照大御神を最高神とする神道に信仰をまとめ生活の規範とするとの布告ですから、文化の価値観に大変革をもたらしました。

神仏判然令が発せられると、全国に廃仏毀釈の嵐が吹き荒れ、寺院仏閣が破壊されたばかりか庶民信仰の神社も合祀され、経済基盤を失った寺院は、仏像、書画、建物も売り払い、破却し多くの寺社が廃墟となりました。奈良時代から南都仏教の中心であり、かつ大和一国の経済や産業を支配し繁栄を極めた興福寺でさえも寺僧が還俗し管理されなくなり、五重塔までもが売りに出されたと言われています。石上神社の神宮寺である内山永久寺はすべての伽藍が打ち拂われ、仏像や什器は散佚しました。このような廃仏毀釈の嵐は全国を席巻し、特に薩摩・長州・土佐など明治維新を推進した諸藩で顕著にみられました。

この時に破却したり流出した文化財は数知れず、日本に所在していれば国宝になる美術品が海外の美術館・博物館の所蔵となっているものも少なくありません。大きな社会変動・価値観の転換が起きたアジア・太平洋戦争敗戦後にも同様のことが起きています。残念でしかたありません。

2 1888年（明治21）フェノロサ「奈良ノ諸君ニ告グ」

アーネスト・フランシスコ・フェノロサはアメリカ・ハーバード大学で政治経済学を修め、1878年（明治11）に東京大学に着任し、政治学・哲学・理財学を教えました。来日後に日本美術の研究を始め、1884年には文部省図画調査会委員に任命され、以後、文部省職員の岡倉天心とともに近畿地方の古社寺を中心に調査を行い、政府の宝物（文化財）保護の基礎づくりに貢献しました。

フェノロサの講演「奈良ノ諸君ニ告グ」は1888（明治21）年6月、奈良県知事・税所篤らの依頼により奈良三条通りの淨教寺本堂で行われました。

フェノロサは言います。「奈良はローマと同じく古代には優れた文化を誇っていたが、やがて政治の中心から外れ栄華から見放された。しかし中世を迎えたローマは宗教・文化都市、ヨーロッパの中心として復活するが、奈良は未だ再生していない。その違いは、古代の美術を研究しそれを生かした社会を創るか否かにある。奈良には、正倉院はじめいたるところに優れた美術品があるが、これらを珍奇な骨董と見るだけではだめである。その由来や製作技術、作品の背景となる歴史や文化を丹念に調査研究し認識することが大切であり、奈良には研究を深める素地が十分にある。奈良の宝は日本の宝であり、世界の宝である。これを研究し復興することは奈良の諸君の義務であり誇りでもある。奈良の諸君奮起せよ。」

フェノロサの「奈良ノ諸君ニ告グ」に共感したのでしょう、1892年（明治25）に般若寺に保勝会が結成され、税所篤・平田好を発起人として笠塔婆が再建されます。この笠塔婆は、もとは同寺の南大門前に建っていたのですが廃仏毀釈で遺棄されたのです。フェノロサの思いは、今に生きる私たちの心を強く捉えます。一外国人の感想とするにはあまりにも深い真実がこめられています。

3 1913年（大正2）古社寺保存会の建議書

岡倉天心が委員を務める古社寺保存会は法隆寺金堂壁画の保存方法研究の必要を訴える建議書を文部省に提出します。建議書は「法隆寺金堂ノ壁画ハ現今世界ニ知ラレタル東洋各国壁画中最モ優秀ナル者……永遠ニ保存スベキ方法ヲ講究スルハ復タ極メテ必要ナルコト……近年其ノ頽廃日ニ甚シク若シ今日ニ及ンデ適当ノ措置ヲ為サズンバ此ノ貴重ナル国宝モ竟ニ滅絶ニ帰スルノ患イアリ……此際当局ニ於イテ各方面ノ智識ヲ集メタル委員ヲ設ケテ充分ノ研究ヲ加ヘ……」（……は略部分）と述べています。

天心は明治維新政府の政策・神仏判然令（神仏分離令）がもたらした廃仏毀釈の嵐によって荒廃する寺社の美術品調査をフェノロサと行います。また、フェノロサとヨーロッパを逍遥し、キリスト教会の壁画、インドのアジャンタ洞窟の仏教壁画を訪れ、法隆寺金堂壁画が世界美術史上その価値に遜色はない、いな、より優れた作品であることを確信し、建議書をしたためるのです。

そこに述べるのは金堂壁画の優秀なることと共に、その保存方法の研究には、美術のみならず微生物学、気象学、化学などの科学、いわゆる人文科

学と自然科学の学際研究を行うべきと主張するのです。１００年前に既に学際研究を提唱している天心は時代の先を読む偉人というべきでしょう。

建議書が文部省に提出されてわずか1か月後に天心は病没します。しかし、彼の意志は引き継がれ、3年後の研究の実現、1934年（昭和9）に始まる法隆寺昭和大修理、そして1949年の金堂火災の後も、学際研究の体制は引き継がれ、その成果は金堂再建、壁画再現となって示されます。

私の研究分野である保存科学は学際研究の典型例であり、天心は保存科学の父と言えるのです。

4 1972年(昭和47)高松塚古墳 2002年(平成14)レバノン壁画地下墓

1972年3月26日(日)の新聞は一斉に高松塚古墳の壁画発見を「飛鳥美人」のカラー写真とともに報じました。古墳時代は稚拙な原始絵画の時代と信じていた私達に衝撃を及ぼし、このニュースは瞬く間に全国に、東アジアにと広まりました。

法隆寺金堂壁画保存研究から引き継がれた学際的体制のもと研究が行われた結果、1300年以上壁画を守り続けてきた石室は外気・外光から遮断され、かつ安定した温度・湿度環境であることがわかりました。それならば従前の環境を維持することにより壁画の永久保存が可能と確信し、空調機器による保存管理施設が設置されたのです。

ところが1980年代以降壁画表面にカビの発生、虫の侵入などがあり、様々な対応措置を行うものの効果は見られず、2007年には石室を解体し壁画を取り出す苦渋の決断に至ったのです。

さて、アジアの西の国レバノンの壁画地下墓は高松塚古墳とは対極に位置しています。2002年から筆者らはティール市(スール市)郊外で紀元1～2世紀のローマ時代の壁画地下墓の保存修復と取り組みました。レバノンは内戦やイスラエルの侵攻などで多くの遺跡が破壊されました。2000年のイスラエル撤退後、社会基盤の再建・復興にはレバノン人の心の拠り所であるフェニキア民族の誇り、アイデンティティが必要とされました。

さて、レバノンでは、壁画を保存管理する空調施設など望むべくもありません。そこで修復後どのような保存管理が可能かを考えた結果、2000年間壁画を保存してきた環境、すなわち外光から遮断され安定した温度・湿度に戻すことでした。

私たちの1年に1か月間の調査・修復では、日々の墓室入室時に温度が上昇して湿度が下降しますが、翌日には常態に戻り、また、カビなどの微生物を持込みますが1年後には常態に戻っています。そうした経験から自然の環境バランスの保持力・回復力を利用した保存管理法を学びました。

高松塚古墳壁画の劣化損傷の要因は地球温暖化であるとされています。機械管理により永久保存が実現できるものとの科学技術への過信と誤判断の結果といえましょう。

5 2011年（平成23）東日本大震災 津波被災文化財の保存修復

東日本大震災のような巨大災害は瞬時にして膨大な文化財を毀損、消滅せしめます。被災した国宝や重要文化財などの国・都道府県・市町村指定の文化財は法律・条令にしたがって救出され保存修復がなされますが、未指定の文化財は身近な歴史や文化を解く極めて大切な文化財であるにもかかわらず救出する公的手段がありません。

これらを救うのは民間のボランティアの力です。1995年の阪神淡路大震災でその芽生えがあり、東日本大震災では重要な役割を担いましたが、未だ文化財救援活動の一画には位置づけられていません。それは、文化財が公的な存在であることから民間が扱うことへの不安感があるのでしょう。しかし、今日では民間ボランティアは充分な智識、技術、行動力を持ち、行政の手の及ばない救援活動を担うことができるのです。

私が活動していた奈良大学保存科学研究室、そして現在の文化財保存修復市民の会は、2011年から16年まで、東日本大震災の津波に被災した南三陸町歌津・西光寺の経典や文書2500点の保存修復を行いました。私たちのボランティア活動がなければ、公的援助もなく消滅したかもしれません。保存修復を終えた経典は2012年に犠牲者を悼み被災者の心を慰める法会に使われ、地域社会のコミュニティの復興に役立っているのです。

6 平城宮跡の国営公園化と国土交通省による整備

社会変革と価値観の転換に伴う文化財の棄却、戦争や自然災害による瞬時の文化財の消滅、そのような文化財危機の歴史の中で、1950年代以降の社会インフラの整備、産業・住宅開発に伴う遺跡の調査と破壊、また、近年の整備と銘打つ文化財の過度の整備が静かに確実に進んでいます。

今は歴史ブーム、文化財に興味を持ち、訪ねる人が急増しています。そうした社会の要請もあって遺跡整備や文化財の修復が盛んなのですが、埋もれた遺跡を歩き、見て、考え、一人ひとりが想像する歴史像が大切であって、作られた歴史像を強要されるのでは歴史復原の醍醐味はありません。過ぎた遺跡整備は歴史像の固定化となり、人の考える力、創造力を劣化させかねません。これもまた、静かなかつ善意（?）の文化財の毀損でありましょう。次世代の人々はこの静かな文化財の毀損の時代をどのように評価するでしょうか。

反保隆臣（たんぼたかおみ）さん追悼特集

平成29年2月15日帰幽（満88歳）

毎年恒例、反保ファミリーの新年会
今年は１月４日、「かごのや」で
隆臣さん（中央）は入院中の大倭病院から外出許可をもらっての参加だったとのこと

もう少しお世話をしたかった！

（長女）芝　香須弥

私が幼い頃、父は畑仕事をしていて、よく見に行ったものです。特に父が作ったトマトの匂いが今でも忘れられません。

父は早起きで四時半頃には周囲を気にせずに雨戸を開けていました。

母が施設で夜勤の時には「今日は赤か白か、どっちにする？」と言い、父特製の焼き飯を作ってくれました。赤はチキンライスです。

プレス、ブロック、レリーフ、倭商の業務に従事させてもらっていたが、「しんどい」と休んだのは記憶にありません。そんな父ですが、熱が少しでもあると、大げさに「しんどい、しんどい」と言っていたのを思い出します。

多種多様のライセンスを保有していて、調理師から危険物、電気、ボイラー、旅行業務等、何にでも取り組んで意欲的でありました。

旅行が好きで、本当にあちこち巡りましたね。昨秋、最後かも知れないと決めた場所は、やはり生まれ故郷の和歌山を希望、白浜に行きましたね。

今年一月十六日、三週間の入院生活から自宅に戻り、三～四日に一度の入浴を、いつも「気持ちいい」と言って喜んでくれましたね。少しの介助だけで頑張り、でも「しんどかったでしょ」。もう少し入浴や食事の介助してあげたかったよ。

お父ちゃん、拝殿で流れるハーモニカの「黎明大倭」、今まで聴いた中で一番、最高だよ！

響け、お父ちゃんのハーモニカ！

（次女）中村　千久佐

幼い頃から厳しくしつけられ、子ども心には恐怖心しかありませんでした。毎日のように叱られる私等を、母は常に助けてくれていました。

大の巨人ファンであった父とTVでナイター中継を観戦した時、背番号で選手がわかると、「すごいなあー、お前は頭悪くないんやー」とよく言われました。

六十歳直前に胃癌の診断を受け、余命一年を宣告され、その後も数々の肉腫で手術を受け病魔と闘ってきた父は強かったし頑張ったよ。

晩年には、父は母に「子どもが多くて良かったなあー」とつくづくと言ったそうです。

昨年末から入院して今年一月十六日に退院するまでほぼ毎日病院に行き、食事などの介助をすると大変喜んでくれ、心待ちにしてくれていました。病室で二人の時、父はふと「一番厳しくしたお前に、こんなに世話してもらえるとは思わんかった。ありがとうな」と喜んでくれてた矢先のことでした。

今でも拝殿からお父ちゃんが吹くハーモニカの「くにのもと」「黎明大倭」が聞こえてきそう。

本当に淋しい限りですが、これからはお父ちゃんの分までお母ちゃんを大切にして行きますからずっと反保ファミリーを見守って下さいね！

最後に生前中、父がお世話になった全ての皆様に深謝申し上げます。

拝

お父ちゃん、長い間お疲れ様でした

（三女）吉澤　都史季

私が子どもの頃から、お父ちゃんに掛け算の勉強をさせられ、二の段から九の段までよく言わされていました。解らなかったり間違えたりすると、すかさず手が飛んできたものです。そんな厳しいお父ちゃんも六十歳直前に大病を患い、確実に痛くて辛いと思うのに殆んど何も言わず、またその後、何度も何度も病が襲いましたが、子ども達には愚痴ったこともありませんでした。「度胸・根性・尊敬」という思いをいつしか抱く様になりました。

主治医に長くて四ケ月位だと言われた事もありましたが、すごいお父ちゃんでした！　法主様がきっと守って下さったと思いますが、復活してハーモニカを吹ける様になりました。月次祭でお

父ちゃんのハーモニカを吹く姿に私達娘が見ていて涙が止まらなかったことがありました。

お父ちゃんに顔が一番似ている私ですが、「度胸・根性」は強くないので少しでも見習っていきたく思います。亡くなる少し前も、手を握りながら「私も強くなれる様に頑張るからね」と言うと、「うん」と頷いてくれた様に思えました。

みんなに見守られ静かに旅立ったお父ちゃん、子どもや孫、曾孫を大切にしてくれたよね。

「今まで本当にありがとう！」

遺影を見つめていると「お前は可愛い奴やな」と言ってくれていると思うのは私だけ？

父ちゃん、色々な思い出ありがとう

（長男）　反保利通

昔大倭のブロック工場で働いている時の父ちゃんは、肌の色が日に焼けて色黒で凄い筋肉質の体をしていました。小柄ではありましたが、分厚い胸板で大きく見えました。父ちゃんの子供としては、一つの自慢で憧れでもありました。

怒った時は、かなり怖い父親で、木刀を持って追いかけられたり叱られたりしましたが、それは悪い事をした時だけだったと思います。今思えば比較的優しい父親だったかも知れません。

旅行や遊園地にもよく連れて行ってもらった記憶があります。車が無かったので電車の旅行が主でしたが、時には船を利用した旅行もありました。それぞれ楽しい思い出として残っています。

和歌山の田舎に帰った時は、泳ぎが達者な人だったので、結構沖の方まで泳いで行ってたと思います。余り泳げない私はうらやましい気持ちもありましたが、恰好よさも感じました。

父ちゃんは、昔楽団に入っていた関係もあってか歌が好きで、特に演歌が好きで村田英雄のファンで、息子の私もその影響で「無法松の一生」や「夫婦春秋」などを覚えてよく歌っていました。

佐紀久が赤ん坊の頃には、自分の作った替え歌を歌ってあやしていました。結構リズム感のある歌を作って歌っていました。

数々の思い出がよみがえってきますが、今もまだ何処か旅行にでも出かけていて、そのうち「お～い、帰ったで」と声が聞こえそうな気がします。

お父ちゃん、今日の調子は？

（四女）　竹本佐紀久

「お父ちゃん、おはよう、今日の調子は？」って聞くと「まあまあやな」と少し微笑んでお父ちゃんが返事。この会話が挨拶代わりやった。帰る時は「又顔出したってくれよ」っていつも言われてたね。

お父ちゃんは厳しい父親だったと姉達からは聞くけど、私はお父ちゃんに怒られた記憶もないし、何より毎朝部屋のゴミを集めてくれ、また寝起きの悪い私を起こしてくれたりと、やさしいお父ちゃんでしかなかった。私が赤ちゃんの時には「佐紀ちゃんは可愛い子だ、寝んねしな、チョチョリン♪」って歌いながら寝かしてもらってたって、おネエが少し羨ましそうに話してくれてたよ。

一歳足らずの良成をいつもそうやって寝かしてくれてたもんね。千阿貴、謙祥、良成はお父ちゃんに買い物、映画に旅行と……どれだけ連れて行ってもらったやろー。良成が小さかった頃に好きで買ってたお菓子を、大きくなってからも買い物に行く度に買っておいてくれたね。お父ちゃん、ありがとう。

うちの子供達は一緒に生活していた事もあり、お父ちゃんに特別な思いがあった様に思います。

お父ちゃんが病院に運ばれる数時間前に食事を食べさせたり、体を拭いたり、時には冗談を言って話が出来た事、お父ちゃんが呼んでくれたとしか思えません。玄関から「ただいま」って入ってくる気がします。「お前は又そんな事言うてんのか！　アホか」って言うてるんやろ。

平成29年 大倭会行事のお知らせ

禊　会　毎月第２日曜日

文化行事

第333回　４月16日（日）／春爛漫の宇治へ

第334回　５月21日（日）／明石の柿本神社

第335回　６月18日（日）／大阪大川の船巡り

第336回　10月29日（日）・30日（月）／　未定

文化講演会　11月11日（土）／　講師：宮﨑賢氏
35年余、ハンセン病問題に関わるニュース・ドキュメンタリー番組を世に送り出している報道カメラマン

＊大倭会へのお誘い　年会費１万円＊
郵便振替　：０１０６０－６－３１７０５

寸莎

第123回

中本　好子さん

真直ぐに

法主法話の文字起こしを手伝って下さっている中本好子さんは、現在広島県の尾道と呉のほぼ中間にある安芸津からフェリーで三十分、瀬戸内海に浮ぶ大崎上島に暮らしている。ご主人の実家があるこの島に、夫と今は亡き柴犬のマリアを連れて移り住んでから十二年になるそうだ。

「神峰山に登り、悠久の昔から続く多島美と称される島々の光景を見ていると、ここで住んでもいいかな」と思ったのだという。

好子さんの父、森田員好（かずよし）さんは兵庫県川辺郡猪名川町紫合（ゆうだ）の出身で、四百年続く源氏の直系である事を誇りにしていた。代々長男の名には義の字が付けられたそうだ。

員好さんは家屋敷のある農家で育ったが、商売好きであったため大阪へ出て商売を始めた。都心であるが当時は夜空の星がきれいに見えた梅田で昭和二十三年十一月、好子さんは二男三女の末っ子として誕生。

父親は明るく世話好きで商売をしても当たるのだが、お人好しすぎてすぐに連帯保証人になり他人の借金を抱えてしまうので、母ウメノさんは大好きな着物を一枚二枚と質に入れやり繰りに苦労されたそうだ。

好子さんも小学校を三度も転校し環境の違う下町の借家に移り住むがそれでも、「それまでは歳の差から兄姉に相手にされなかったけど、狭い家で家族が肩寄せあっていられるのが、末っ子として嬉しかった」。

高校では演劇部に所属し、卒業後もしばらく劇団に入っていたが、結果としてその後の人生では、昨年の三月まで約二十年間福祉職に就く事になった。これには法主さんの「宗教は福祉である」という言葉が影響している。

それは、五十歳を前にして離婚した頃の事。生きていく希望を無くしそれでも何とか自立していかざるをえなくなった時、法主さんの言葉が脳裏に浮んだ。「そうだ福祉の仕事を精一杯やればできるのではないか。どうか福祉の仕事を与えて下さい。一生懸命致します」。一心に祈り西宮の有料老人ホームに勤める事ができた。見つけた宝塚の古いマンションでは隣人に恵まれ、連れてきた愛犬マリアとの新生活が始まった。

介護福祉士とケアマネジャーの資格を取得。「汚い事も嫌だと思った事はないし、入浴介助をして利用者が喜んで下さると自分も嬉しく、それが励みになる。福祉職は合っているのかもしれないと思いました。

五十代での介護職は体力的にしんどかったけど、それでも踏ん張ってこられたのは、母親を十歳で亡くし父も亡くなり、いつか自分も霊界に帰った時に〝よくやった〟と両親にほめてもらいたい。法主さんに〝よくやった〟と言っていただきたいという思いに支えられたからです」

好子さんは三十代半ばに入っていたヤマギシ会を離れている。その頃友人を介して初めて会った女性に求職している事を話すと即座に、「病院の事務をしてくれる人を探している。給料は多くないけど良ければ来ない？」と言ってもらい、その家族の経営する尼崎の病院に勤めながら節約生活を続けた。

やはりヤマギシ会を出られていた石垣雅設さんのつくった出版社、野草社の本で自然農の川口由一さんを知り、赤目自然農塾に参加。「土の魅力、参加者の考え方、理屈ではなく皆さんが無報酬でお互いに助け合われる姿が新鮮でほんとに癒されていきました」という。

九一年夏、石垣さん達と共に紫陽花邑で法主さんに初対面。翌年、病院を退職し、野草社の引越しを手伝いながら青森から京都府綾部までの旅に同行。法主さんに再会する。

それをご縁に後年、時々法話の文字起こしをしながら心の中で法主さんとの対話を重ねた。

五十七歳の時、大阪の守口で父親が経営していた喫茶店「モカ」の長年のお客さんで、父親のお世話をよくしてくれていた中本和雄さんと結婚。大崎上島に越す事になる。

「昨年、姉の充子（みつこ）が帰幽してから霊界をより身近に思えるようになりました。

少しずつでも自分も変わってこられたかなと思えるのは法主さんのお蔭。法主さんは現世利益ではなく本質を教えて下さる。今後もそれに向って生きたい」（聞き手＝李章根）

あじさい日誌

2月12日　禊会。この日は久しぶりの出口三平・藤本宏秋・中本好子さん、初参加の畑山あんじゅさん（西宮市）、10年ぶりに来邑という左京源皇（みなもとのすめら）さん（ご本名です。愛知県尾張旭市）らで賑やかでした。

2月13日　隣保家庭として平成6年まで邑の住人だった金昇允（菅野）さん帰幽。お互いの認知症予防にと囲碁に誘って、いい時間を頂きました。いつも戦闘的？な打ち手でした。有り難うございました。（杉本順一）

午後、北村聡子さん（大阪府豊中市）が来訪されました。

2月15日　大倭神宮月次祭。

この日静岡県から石垣雅設・清水夫妻（袋井市）の案内で磯部泰敏・ツヤ子夫妻（磐田市）とその子、将紀・智香子夫妻とその子、岬希・尚吾・凪佐三さんの家族7人が神宮へ参拝、あと紫陽花邑に来られました。

午後4時、紫陽花邑の杉本朝順・利恵夫妻に次男誕生。秀朝（ひでとも）と命名されました。

夜7時32分、聖歌「黎明大倭」を作曲された反保隆臣（満88歳）さんが帰幽されました。

2月17日　それまで降っていた雨が止んだ午後7時、大倭拝殿において反保隆臣さんの前夜祭が行われました。

2月18日　前夜祭に続き午後1時半から反保隆臣さん帰幽祭。

2月23日　この日午前中、有志の皆さんが拝殿で祭典準備中、お掃除と並行する形で『おおやまと』発送作業をしてくれました。先月号「求むボランティア」が、早速ありがたい報告です。

大倭神宮で午後1時30分から申孝祭が、大本宮拝殿で2時から月次祭が行われました。遠藤浩子さん（千葉県船橋市）が久しぶりに、大西佐知さん（奈良市）が初めて参加されました。

2月25日　岸田若葉さんが友人の椎名ジエゴさんと来邑。

FIWC定例委員会は大阪開催。その後、交流の家で委員会報告、印刷と発送。

3月6日　大倭神宮月次祭。

夜、大倭会館で邑倭の会。

3月10日　教務本庁の屋根塗り替えと樋の落葉止め工事が始まりました。

大倭安宿苑では

3月2日　菅原園厨房出火想定で防災避難訓練。水消火器の訓練も行いました。（菅原園）

3月4日　ボランティアさんへの慰労と感謝のお茶会。（須加宮寮）

3月3日　ひな祭り。ゲームやお内裏様、おひな様と写真撮影。（長曽根寮）

2月23日（特養）　7名（内傘寿1名）の方の誕生日をお祝い。

2月25日（デイ）　躍遊会の皆様による河内音頭、等々。（茂毛蕗園）

2月21日　7名の方が参加、施設長と定例懇談会。（八重垣園）

2月14日　5名の女性も手伝いひな人形の飾り付け。

あんない

＊月次祭（大倭神宮）

4月6日（木）　午後2時より大倭神宮にて。

＊須佐緒祭（大本宮）

4月8日（土）　午前11時より大倭大本宮拝殿において祭典を行い正午より各自持参の弁当などで園遊会を行います。

須佐緒祭とは、宇宙万物一切の顕幽両面における一体のもとたる須佐（すさ）（結び）の緒に感謝をするお祭りです。

＊大倭会主催第579回禊会

4月9日（日）　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

＊箭負祭（やおい）（大倭神宮）

4月15日（土）　午後2時より大倭神宮にて。

箭負祭とは、皇祖天神（おやてんじん）の鎮ります登美の神奈備（大倭神宮）の霊威を法主日聖大恩師の遠祖（箭負氏）が代々祭祀し、神仕えしてきたことを記念するお祭りです。

＊月次祭（大本宮）

4月23日（日）　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

編集後記

▼2月号「日本の歴史が本当の継承をしてこなかったこと」について、法主さんは「顕彰」と話しておられるのではないかとご指摘がありました。聞き直してみると、どうやら聞き間違いだったようです。耳で聞いて文字にするのですから、こういうことは時に避けがたく、過去にもありました。必ず（文責・編集部）とお断りするわけです。

ただ、「継承」でいい感じと思ったわけで、「日本の歴史が本当の顕彰をしてこなかったこと」であったら、今風の語感でないしタイトルにまでしたかなあ。

法主様は、話す時の言葉は書く時の言葉と違う。読みやすくしてほしいと、いつもそれだけを言われ、結果について何も言われたことがなかったし……と棚上げにしていますが。

▼先月号7頁、永仮あづみさんの文章は行き違いで時間切れ、「目に見えない魂の尾が、健やかで太く美しいエネルギーが供給されるような生き方をしたいものである」で印刷されてしまいました。発行後の推敲をしてもらうと、「魂のイメージ図（白い丸に尻尾）から『尾』と書いていました。玉緒祭に因んでいるので、意図的には『緒』でした。が、好きに読んでください」ということです。（春）

第333回大倭会文化行事

春爛漫の宇治を訪ねる

日にち　平成29年4月16日（日）雨天決行

集　合　京阪黄檗駅改札口　10時45分

交　通　近鉄西大寺駅「京都国際会館行き」急行９時21分発、丹波橋９時53分着⇒京阪に乗換え４番線・準急「淀屋橋行き」10時15分発、中書島10時20分着⇒３番・宇治線に乗換え10時32分発、10時42分黄檗駅

◎ＪＲ奈良駅から京都行き快速９時53分に乗り、宇治にて普通に乗換え、黄檗駅10時32分もあります。京阪黄檗駅まで徒歩すぐ。

ルート　万福寺・宇治神社

少し歩きますので軽装でどうぞ。食事はお店で。

問合せ　林　修三　電話 080−2527−0840

湯浅芳郎　090−6987−5847